

おうてもん 心理職リカレントセミナー (2024 年度 Web 開催)



本年度を締めくくるにあたり、追手門学院大学心理学部／大学院心理学研究科では、心理職として、人々の暮らしと育ちを守る活動に奮闘されてきた方々の一層の職能の向上と市民との連携を願い、下記セミナーを企画しました。皆さまのご参加をお待ちしております。

対象：心理職、学生、一般市民

参加費：無料

参加登録：Web 専用サイト（追手門学院大学／日本臨床発達心理士会／学校心理士認定運営機構の各ウェブサイトに設置）からお願いします。

会場 URL：各回開催 3 日前から参加登録者に、メールにてお知らせします。

第1回 2025年3月1日（土）13時30分～15時30分

【「日本臨床発達心理士会滋賀支部主催資格更新研修会（0.5 ポイント）」（申請中）

「学校心理士研修会（B1 ポイント）」を兼ねる実施】

テーマ：乳児の歩行をめぐる発達カスケード

講演：外山 紀子（早稲田大学人間科学学術院・教授）



1993 年、東京工業大学総合理工学研究科博士課程修了。博士（学術）。2003 年、津田塾大学学芸学部助教授、2011 年より現職。専門は発達心理学。食や病気といった生物学的現象について、子どもがどのようにして知識を獲得していくのかを、実験や観察から検討してきました。子どもが自ら対象に働きかけ、能動的に世界に関する理解を構成していく学びの過程で欠かせない他者とのかかわりを含め、環境世界を視野に入れた発達研究を推進してきました。主な著訳書は、『発達としての〈共食〉』（単著、新曜社）、『心と身体の相互性に関する理解の発達』（単著、風間書房）、『やさしい発達と学習』（共著、有斐閣）、『子どもの知性と大人の誤解』（単訳、新曜社）、『よくわかる家族心理学』（分担執筆、ミネルヴア書房）、『発達心理学』（分担執筆、学文社）など。最近著に『歩行が広げる乳児の世界—発達カスケードの探求』（共著、ちとせプレス）。

内容：二足歩行はヒトの特徴のひとつです。赤ちゃんはハイハイからつかまり立ちを経て、1歳頃に歩き始めますが、この時期は養育者とのコミュニケーションのとり方も、おもちゃの遊び方も、言語も大きく変化する時期です。歩行は運動領域、コミュニケーションや言葉は言語領域というように、それぞれの発達は独立したものと考えられがちですが、これらは連動しています。ちょうどドミノ倒しゲームで、ひとつのブロックを倒すと、それに連なるブロックがパタパタと倒れていくように、ある領域の発達が別の領域へと波及していくのです。カスケードとは、こうした連鎖的な反応様式をさすことばです。本研修会では、赤ちゃんの歩行を取り上げ、歩き始めることがおもちゃの遊び方、そして養育者とのコミュニケーションのとり方へと波及していく、赤ちゃんの世界を大きく広げていくことについてお話をしたいと思います。

第2回 2025年3月8日（土）13時30分～16時45分

【「日本臨床発達心理士会滋賀支部主催資格更新研修会（1ポイント）」（申請中）
「学校心理士研修会（B1 ポイント）」を兼ねる実施】

テーク：心のダークサイドの心理学

講演者：増井 啓太（追手門学院大学心理学部・准教授）：



広島大学で博士（学術）を取得。犯罪やインターネット上の様々なトラブルが発生する原因について、加害者の心理的特徴に着目した研究に従事してきました。併せて、犯罪抑制のための社会環境要因について、犯罪心理学、社会心理学の観点から検討し、犯罪抑止や再犯防止に役立てていくこと、さらに、地域住民や役所、地元警察署などと協力しながら活動することで安心・安全社会の確立に向けた知見獲得を果たすことを目指しておられます。主な著訳書に、『進化精神病理学—心理学と精神医学の統合的アプローチ』（共訳書、福村出版）、『心とは何か（OIDAI ライブライリー 002）』（共著、追手門学院大学出版会）『入門 司法・犯罪心理学：理論と現場を学ぶ』（共著、有斐閣）。

内容：我々は社会的動物であり、他者と協力しながら社会生活を送っています。しかし、私たちのなかには他者に共感せず、自己中心的な振る舞いをする人たちも存在します。近年、そのような人たちに共通する特性として「邪悪な」性格特性に注目が集まっています。私はこれまで「邪悪な」性格特性を強く持つ人たちの行動や意思決定の特徴について研究を行ってきました。それらの研究知見から、彼ら・彼女らの社会的に不適応な側面について議論していきたいと思います。その一方で、そのような人々は一部の人たちから関係構築を求められることも明らかとなっていました。本セミナーでは、どのような状況で、どのような人々から「邪悪な」性格特性を強く持つ人が求められるのかを説明することを通じて、彼ら・彼女らの進化的・社会的適応の側面をお伝えできればと考えています。

追手門学院大学 UI ステートメント



追手門学院大学の教育理念は、「独立自彊・社会有為」。

OTEMON GAKUIN

人文・社会科学系の多様な学部が一同に集い、学生と教職員との顔の見える関係を活かして、誰もが学生一人ひとりと向き合い、個性を尊重した成長支援を行います。伝統の自由な校風と、北摂の豊かな環境のもと、学問だけにとどまらず、地域活動や学内での多彩な成長の機会に学生を導き、主体性を引き出します。

専門教育、研究と同じく重要な、人間教育からキャリア教育までを通じて大学4年間の個々の成長に責任を果たすことを使命とします。

地域からグローバル社会までの様々な場で、社会的使命実現のために行動し、自分を変えていける人格が育つ、追手門学院大学です。

第3回 2025年3月15日（土）13時30分～15時30分

【「日本臨床発達心理士会滋賀支部主催資格更新研修会（0.5ポイント）」（申請中）
「学校心理士研修会（B1ポイント）」を兼ねる実施】

テーク： 脳は経験や環境によって変化する

講演者： 守田 知代（国立研究開発法人情報通信研究機構 未来ICT研究所 脳情報通信融合研究センター・主任研究員）



京都大学で博士（人間・環境学）を取得。自己認識や運動発達、社会的相互作用など、子どもの発達を支える神経基盤の研究に従事してこられました。長らく、経験や環境の質の改善をめざす脳科学研究プロジェクトに参画しておられます。日本語主著に『自己を知る脳・他者を理解する脳』（共著、新曜社）、『ロボットを通して探る子どもの心：ディベロップメンタル・サイバнетイクスの挑戦』（共著、ミネルヴァ書房）、『脳百話—動きの仕組みを解き明かす』（共著、市村出版）

内容： 脳には、経験や環境によって柔軟に変化する力（可塑性）が備わっています。例えば、ピアノを一生懸命練習すれば、そのとき脳では、神経線維が太くなったり神経回路が組み替えられたりと、様々な変化が起こります。その結果、ピアノを上手に弾くことができるようになるわけです。発達段階にある脳では、特にこうした可塑的な変化が起こりやすいため、神経回路の基礎が形成される発達期に、どのような経験や環境を与えるかが重要な課題と考えられます。また一方で、大人になっても可塑性は失われるわけではなく、経験や環境に大きな変化が起こると、それに適応するように、脳は変化します。可塑性が最大限発揮されるのは、脳に非常事態が起こった場合です。ある脳領域が損傷し、機能しなくなると、別の領域や回路が失われた機能を代償するなどの変化が起こります。私はこれまでに、MRIを用いて子供から大人まで様々な年代の脳を調査してきましたが、そこで見られた可塑性の例をご紹介しながら、私たちの経験や環境のあり方について議論します。